

日本の古典より

古事記

天地あめつち初めて發はけし時とき、

高天たかまの原はらに成なる神かみの名なは

天之御中主あめのみなかぬしの神かみ。

次に高御産巢日たかみむすひの神かみ。

次に神産巢日かむむすひの神かみ。

此このの三柱みはしらの神かみぞ、

並びならに獨ひとり神かみと成なり坐いまして身みを隱かくしたまふ。

古事記

天地初めて發けし時、

高天の原に成る神の名は

天之御中主の神。

次に高御産巢日の神。

次に神産巢日の神。

此の三柱の神ぞ、

並びに獨り神と成り坐して身を隠したまふ。

竹取物語
たけとりものがたり

今は昔、竹取の翁といふものありけり。

野山なる竹をとりて、

よろづの事につかひけり、

名をば、さるきのみやつこといひける。

その竹の中に、もと光る竹、一筋あり。

あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。

それを見れば、三寸ばかりなる人、

いとうつくしうて居たり。

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふものありけり。

野山なる竹をとりて、

よろづの事につかひけり、

名をば、さるきのみやつこといひける。

その竹の中に、もと光る竹、一筋あり。

あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。

それを見れば、三寸ばかりなる人、

いとうつくしうて居たり。

翁 おきな いふやう、

「我朝われあさごと夕ゆうべに、見る竹たけの中に、おはするにて知しりぬ。

子こになり給たまふべき人ひとなんめり。」

とて、手てにいられて、いゑえにもてきぬ。

妻めの女おんなにあづけて、養やしなはず。

うつくしきこと、かぎりなし。

いとおさなければ、籠こにいられてやしなう。

竹取たけとりの翁おきな、なを竹たけをとるに、この子こを見つ付けてのち、

とる竹たけに、節ふしをへだてて、

ことに、黄金こがねある竹たけ、見みつくる事ことかさなりぬ。

かくて翁おきな、やうやうゆるらかにゆなり行く。

翁 いふやう、

「我朝ごと夕に、見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なんめり。」

とて、手にいれて、いゑにもてきぬ。

妻の女にあづけて、養はす。

うつくしきこと、かぎりなし。

いとおさなければ、箆にいれてやしなう。

竹取の翁、なを竹をとるに、この子を見つけてのち、

とる竹に、節をへだてて、

ことに、黄金ある竹、見つくる事かきなりぬ。

かくて翁、やうやうゆるらかになり行く。

土佐日記

紀貫之

男おとこもすなる日記にといふうものを、

女おんなもしてみむん、とて、するなり。

それとしの年の十二月しわすの二十日はつかあまり

一日ひとひの日の戌いぬの刻ときに、門かど出すで。

そのよし、いさゝかに

物ものに書かきつく。

土佐日記

紀貫之

男もすなる日記といふものを、
女もしてみむ、とて、するなり。
その年の十二月の二十日あまり
一日の日の戌の刻に、門出す。
そのよし、いさゝかに
物に書きつく。

ある人、ひと 県の四年五年はてて、よとせいつとせ 例の事どもみなし終へて、れいこと 解由げゆなど取りて住む館すたちより出でて、い 船ふねに乗るべき所ところへ渡る。わた
かれこれ、し 知る知らぬ、おく 送りす。

年来としごろよく比べつる人々ひとびとなむ、わか 別れ難くがた 思ひて、おもい
日ひしきりに、とかくしつゝ、のゝしるうちに、よ 夜更けぬ。

廿二日にじゅうにちに、和泉いずみの国くにまで、と、平らかに願がん立つ。

藤原ふじわらのときいずみざね、船路ふなじなれど、馬うまのはなむけす。

上中下かみなかしも、酔よひ飽あきて、いと怪あやしく、

潮海しおうみのほとりにて、あざれあへり。え

ある人、県の四年五年はてて、例の事どもみなし終へて、
解由など取りて住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。
かれこれ、知る知らぬ、送りす。

年来よく比べつる人々なむ、別れ難く思ひて、
日しきりに、とかくしつゝ、のゝしるうちに、夜更けぬ。

廿二日に、和泉の国まで、と、平らかに願立つ。
藤原のときぎざね、船路なれど、馬のはなむけす。

上中下、酔ひ飽きて、いと怪しく、
潮海のほとりにて、あざれあへり。

枕草子
まくらのそうし

清少納言
せいししょうなごん

春は曙。
はる あけぼの

やうやうよよしろくよなり行、やまぎわはすこしあかりて、
むらさきだちたる雲くものほそくたなびきたる。

夏はよる。
なつ

月のころはさらなり也、
つき

闇やみもなを、ほたるの多くとびちがひたる。
お

又、たゞ一二など、
また

ほのかにうちひかりて行ゆくもおかし。
ひとつふたつ

雨あめなどふるも、おかし。

枕草子

清少納言

春は曙。

やうやうしろくなり行、やまぎはすこしあかりて、
むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏はよる。

月のころはさら也、

闇もなを、ほたるの多くとびちがひたる。

又、たゞ一二など、

ほのかにうちひかりて行もおかし。

雨などふるも、おかし。

秋は夕暮。
あき ゆうぐれ

夕日のさして山やまのはいとちかうこなりたるに、
ゆうひ

からすの寢所ねどこへ行ゆくとて、

三四みつよつ、二みつなど、
ふたつ

とびいそぐさへあはれなり。
え

まいて雁かりなどのつらねたるが、

いとちいさくみゆるは、いとおかし。

日入ひいりはてて、

風の音かぜむしの音おとなどいとあはれなり。
ね

秋は夕暮。

夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、
からすの寢所へ行とて、

三四、二みつなど、

とびいそぐさへあはれなり。

まいて雁などのつらねたるが、

いとちいさくみゆるは、いとおかし。

日入はてて、

風の音むしの音などいとあはれなり。

冬は つとめて。

雪の ふりたるは いふべきにあらず。

霜の いと しろきも、

また さらにでも、

いと 寒きに、火など いそぎおこして、

炭もて わたるも いと つきづきし。

昼になりて、

ぬるく ゆるび もていけば、

火桶の火も しろき灰がちになりて、わろし。

冬はつとめて。

雪のふりたるはいふべきにあらず。

霜のいとしろきも、

またさらでも、

いと寒きに、火などいそぎおこして、

炭もてわたるもいとつきづきし。

昼になりて、

ぬるくゆるびもていけば、

火桶の火もしろき灰がちになりて、わろし。

源氏物語
げんじ ものがたり

紫式部
むらさきしきぶ

いづれの御時にか、

女御にょご、更衣こうい

あまたさぶらひ給たまひける中に、

いとやんごとなき際きわにはあらぬが

すぐれてときめき給たまふ有ありけり。

源氏物語

紫式部

いづれの御時にか、

女御、更衣

あまたさぶらひ 給ひける中に、

いとやんごとなき 際にはあらぬが
すぐれて ときめき給ふ 有けり。

はじめより我われはと思おもひ上あがりたまへる御方々おんかたがた、
めざましき物ものにおとしめそねみ給たまふ。

同じ程おなほど、

それよりげらうの更衣こういたちはまして安やすからず。

朝夕あさゆうの宮仕みやづかえへにつけても人ひとの心こころをのみ動うごかし、

うらみを負おふ積つもりにやありけむ、

いとあづずしくなりゆき物心ものこころぼそげに里さとがちなるを、

いよいよあかずあはれなる物ものに思おもほして、

人の譏ひとそしりをもえ憚はばからせ給たまはず、

世よのためしにも成なりぬべき御おんもてなしなり。

はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方々、
めざましき物におとしめそねみ給ふ。

同じ程、

それよりげらうの更衣たちはまして安からず。

朝夕の宮仕へにつけても人の心をのみ動かし、

うらみを負ふ積りにやありけむ、

いとあづしくなりゆき物心ぼそげに里がちなるを、

いよいよあかずあはれなる物に思ほして、

人の譏りをもえ憚らせ給はず、

世のためしにも成ぬべき御もてなしなり。

方丈記

鴨長明

ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、
シカモモトノ水ニアラズ。
澱ニ浮カブウタカタハ、
カツ消エカツ結ビテ、
ヒサシク留マリタルタメシナシ。
世中ニアル人ト栖ト、
又カクノゴトシ。

タマシキノ都ノウチニ棟ヲナラベ、薨ヲアラソヘル、
貴キ賤シキ人ノ住マヒハ、世世ヲ経テ尽キセヌ物ナレド、
是ヲマコトカト尋レバ、昔シアリシ家ハマレナリ。

或ハ、去年焼ケテ今年作レリ。

或ハ大家ホロビテ小家トナル。

住ム人モ是ニ同ジ。

トコロモ変ラズ人モ多カレド、

イニシヘ見シ人ハ、

二三十人が中ニワズカニ一人・二人ナリ。

朝ニ死ニタニ生ルル、ナラヒ、タダ水ノ泡ニゾ似リケル。

平家物語

祇園精舎の鐘の声、

諸行無常の響あり。

娑羅双樹の花の色、

盛者必衰のことはりをあらはす。

奢れる人も久しからず、

唯春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ、

偏に風の前塵に同じ。

遠く異朝をとぶらへば、

秦の趙高・漢の王奔

梁の周伊・唐の祿山

是等は皆旧主先皇の政にも従はず、
楽しみをきはめ、

諫をも思ひいれず、

天下の乱れむ事をさとらずして、

民間の愁る所を知らざツしかば、

久しからずして、亡じにし者ども也。

徒然草

吉田兼好

(序段)

つれづれなるまゝに、
日ぐらし 硯に向かひて、
心にうつりゆくよしなしごとを
そこはかとなく 書き付くれば、
あやしうこそ 物狂おしけれ。

おくのほそ道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、
行かふ年も又旅人也。
舟の上に生涯をうかべ
馬の口とらえて老をむかふる物は、
日々旅にして、旅を栖とす。
古人も多く旅に死せるあり。

東海道中膝栗毛

十返舎一九

序

箱根八里の長持唄には、
猛き宰領の心を和らげ、
竹に雀の馬士唄には、鬼殺を爛せしむ。
是その歌の徳利酒、呑や謡の旅衣、
都をさして行がけの駄賃帳を繰返し、
筆の建場に雲駕の、息杖をして急いやらやつと、
書編たる東海道、五十三次